

社会に役立つことを

第一交通産業創業者・相談役

黒土始さん(100)

大分大 経済学部 100周年

同窓生の思い

◇上◇



大分大経済学部への思いを語る第一交通産業グループの創業者であり、相談役の黒土始氏(北九州市)

【大分】大分市の大分大経済学部が今年、創立100周年を迎えた。長い歴史の中で、経済や行政など、さまざまな分野に人材を輩出してきた。出身者に半生を振り返ってもらうとともに、母校への思いを聞いた。

父が農業に従事する傍ら肥料の販売をしていた。その背中を幼い頃から見ていたし、手伝っていた。大分大経済学部の前身に当たる大分高等商業学校(大分高商)に1939年入学し、2年ほど在籍した。

【プロフィール】中津市出身。1939年、大分大経済学部の前身に当たる大分高等商業学校に入学。41年に徴兵のため中退した。中国から復員後、北九州市の門司港で芋あめや、ちり紙の卸会社を設立。運送会社などを経営し、60年に第一タクシーを設立した。2001年に社長を退き、会長、代表取締役創業者会長などを経て22年6月から相談役。

商業教育の拠点に通った理由は。旧制大分中(現・大分上野丘高)3年の時、父と、後に大分大経済学部長になった草場勇氏と3人で進路を話し合う機会があった。2人から「高商は県内で最高の学問の府だ」と勧めら

れた。旧日本軍に召集され、復員後の1960年に北九州市で第一タクシーを設立。保有台数5台から始め、現在では8千台を超える。不動産や介護など事業を多角化し、第一交通産業グループを成長させた。起業家



県立芸術文化短期大の敷地内に残る大分高商の門柱(大分市上野丘東)

として最も大事なことは。自分が一番、興味があることや社会に対して貢献できることは何か。それを考えるのが大事だ。

母校の100周年に黒土始記念講堂の整備資金などを援助をした。後輩たちの視野が狭くなり、スケールが小さくならないよう、学業を支援したいと思った。

8月に基金を創設した。中小零細企業を表彰するそうすね。企業の大半は中小企業。地域のニーズに応え、雇用を生んでいる。新型コロナウィルスの影響や人手不足など厳しい経営環境が続く中、地域や社会に貢献している全国の個人、企業を応援したいと考えた。より優秀な会社が成長できるように支えたい。

後輩たちにエールを。努力は天才に勝る。人生の目標を立てて、社会に役立つことができるよう、勉学に励んでほしい。(聞き手・指原祐輔)